

まほろば主人

宮下 周平

(仁木農場より)

死生の海

イノチ
死生の海



その時、植物は生き死にを超えている世界に居る、ということが降りるようになって分かった気がした。

ユクサたちを後ろに見ると、何と言ったらいのか分からないけど、決して辛そうでも苦しそうでもないのだ。そんな人間的な喜怒哀楽の思いを遥かに超えている所で生きていた。死しても、死んではいない様子なのだ。こんな小さな野の草花だけど、悠然と生きている姿に、ビックリさせられてしまった。

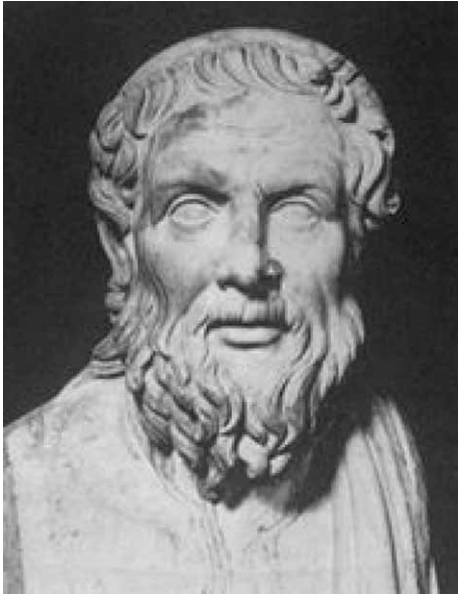
小さい頃から、何とはなしに可憐で清楚で、青色がハッキリしているこのツクサに心惹かれていた。だから、特に心が痛んでいる。ニンジン^{ニンジン}の為だけに、こんなにも周りが、無残にも、根こそぎ抜かれていると、ちよっぴりオセンチになっている。そんな思いで、この抜いたツクサたちを後ろに見ると、何と言ったらいのか分からないけど、決して辛そうでも苦しそうでもないのだ。そんな人間的な喜怒哀楽の思いを遥かに超えている所で生きていた。

「かわいそうに、ごめんね、ごめんね」と、謝っている自分が居る。

今、ニンジン^{ニンジン}を掘っている。
夏場、間引きも出来ず、除草も出来なかった所が残っていた。鬱蒼^{うっさう}としてツクサがニンジン葉の上を覆っている。それを、引っこ抜いては、ニンジン^{ニンジン}を掘るのだが、内心

「かわいいそうに、ごめんね、ごめんね」と、謝っている自分が居る。
赤はこべ(タニソバ)が、婉然^{えんぜん}として微笑^{ほほえ}んだ。
(こんなことが、あるのだろうか?)
隣の白いミソソバに、目を移すと、同じように笑っている。
(自然はお話するというけど、こんなにも語りかけてくるものなのかな?)





Apollonius of Tyana

ティアナのアポロニウス (A.D15 ~ 100 年)
キリストとほぼ同年代に生きたギリシャのネオ・ピタゴラス派哲学者。大魔法使いとしての評判が高い。小アジアのティアナに生まれ、タルサスで教育を受ける。ピタゴラス派の哲学を学び、後に各地を転々としてさらに学問を深め、また魔法を用いて数々の奇跡をなす。没年は不詳であるが、100 歳前後で死去したとも、白日昇天したとも伝えられる。錬金術の聖書とされている「エメラルド・タブレット」を実際に発見し、解明をした人物だとされている。



Avicenna, portrait Major, 241, 263

いわば、1 億年にも満たない類人猿発生以前、32 億年も前の光合成の生命誕生から見れば、遙かに遙かに大先輩に当たる植物の意識、その精神構造自体、全然違う世界、飛んでもなく超絶して神に近いのではなからうか。否、神そのものなのだ。もっと、悠久な時間を生き、もっと広大な空間に生きているではないか。か弱そうで強か、儂きようで壽く、人間のとても叶う相手ではなかったのだ。

私たちが、植物を育てているように思っているが、実はその逆で、育てられている。いや、人間を介して、もっと無限の時、無始の始めから終わりなき終りまで生きている。この圧倒的な別世界に、人はただ棲まわせてもらっている。

その時から、見える風景が一変してしまった。

いつの頃からか、自分の本棚に、三枚のポートレートが飾つてある。

一つはチベットのユトク。もう一つはイスラムのアヴィセンナ。最後にギリシアのティアナのアポロニウス。

何故、敢えて飾っているか、自分でもよく分からない。だが、その画像を初めてみた時、何か妙に惹き付けられるものを感じた。人にあまり知られていない、自分でもよく分かっていないこの三人の人物とは、昔一緒に居たような妙な懐かしい気分があつてのことだ。

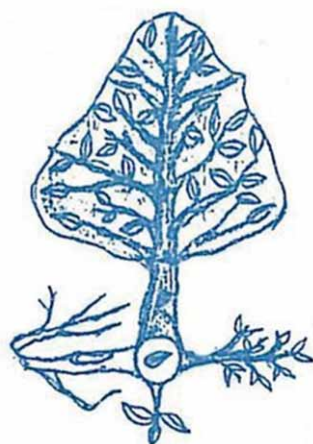
皆、何かチョット一癖二癖もある怪しい医学と秘術と哲学があつて、気持ち似ているな、と思つてのことだった。

その中でも、随分昔に知つたのが、ティアナのアポロニウスで、……彼の箴言が、今なお新しい。

—ティアナのアポロニウス—

だれにも 死というものはない。
それは、ただ、見かけだけ。

だれにも 誕生というものすらない。
それは、ただ、そう見えるだけ。
在ることから、成ることへの変化。
それが、誕生に見え、
成ることから、在ることへの変化。
それが、死に見える。
だが、ほんとうのところ、
だれも生まれず、
だれも決して死にはしないのだ。



この詩とどうか、論しとどうか、イエスと同時代に生きた彼の2000年前の言葉が、今も活き活きと語りかけて来る。

死もない、生もない、それは見かけ、見せかけのことだと言いつつに、ふと、ニンジン畑で体験したことを、思い出したのだ。

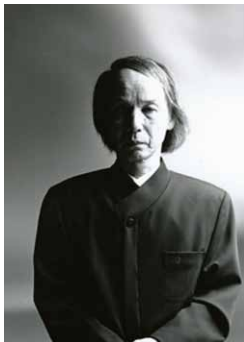
ごく最近、ある本を、農作業の合間合間や、寝る前に読んでいた。800頁にもわたる大著だ。珍しくも、頁を惜しみながら読めた本だった。それは立花隆がインタビュしてまとめた作曲家・武満徹への聞き取り本で、膨大な内容だった。何故、ここでいま取り上げるかは、実は、彼の進路を16歳で決定つけた人だからだ。進学しないことも、独りで求めることも、彼から学んで決意したことだった。ただのファンでは収まらない、のつびぎならぬ関係が武満と自分の中にあっけなく続けたのだ。青春は彼と共にあったと言っても過言ではなかった。だが、訣別するの、一大決心が要った。そんなこんなことを書くとき取り留めがなく、延々と綴らねばならなくなるので、止める。それは、いずれいつの日にか。ただ、今回の『武満徹・音楽創造への旅』で、こんなことを言っていた。それは、やはり死生のことだ。

「人間の生は束の間だが、死は無限だ。しかも、人間の意識の薄いヴェールを隔てて、死はつねに生の直中に生きつづけている。『死は虚無なものではなく、すべては生きてあるもの、すべて存在しているもの、実際の一致』なのだ。すると、こうして眺めている風景も、すべては死の風景と言えなくはない。……」

『生とか死はとるに足らない状態であって、たとえば植物であるとか、鉱物であるとかいうのと同じなのだ』とル・クレジオは書いているが、それだから、この生から死への移行を司る大きな意識、私たち人間の個々に分散して在る無限の意識の存在を信じていることができる。死は決して一つの終末ではない。……」

一つだけ、武満の思想の核心だけを述べたい。

それは、「音の河」という。簡明に言うと、この取り巻く世界は無数の音の河が流れていて、その一つを



武満 徹 (1930~1996年)

日本の作曲家。独学で音楽を学び、若手芸術家集団「実験工房」に所属し、映画やTVなどで幅広く前衛的な音楽活動を展開。尺八琵琶とのオーケストラ曲『ノヴェンバー・ステップス』他多数。20世紀を代表する世界的音楽家であった。



ジャン=マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオは、フランス出身の小説家。1963年、『調書』でデビュー。2008年、ノーベル文学賞受賞。

切り取ることを自分はしているに過ぎない、と語る。

初めと終わりのある時空を完結させるといふ西洋的思考論理の作曲ではなく、宇宙に流れる音の河の一部分を掬い上げる行為だという。だが、そこには、いつも全体が現れている。一掬いの水の中に、世界の海が映っているというのだ。初めもなく、終わりもない、音と曲。

若き日の自分が、そんなにも命がけて追い求めたものが何だったか。それはこの音の河に見立てた「イノチの河」だったのだろう。

この一人の自分は、一掬の水より、まだ小さな一滴の雨だれにも満たない。しかし、イノチの河に流れ込めば、その一滴の水は限りなき海そのものに自分はなってしまう。この短い人生も自分の命も、儂いように見えて、実は永遠の無窮のイノチのさざ波に漂っているだけなのだ。

名もなき雑草の中にも滔々として、このイノチの大河が注ぎ込んで、「おいで、おいで!!」と、私を誘ってくれている。

若き日に邂逅した隷書の大家、胡蘭成大人。

「字の始筆終筆は、そこに始まるに非ず、そこで終わるに非ず。遙か虚空より来たりて筆を起こし、遙か天外の天に向かい筆を伸ばすべし。以て字の神と成す」と、私に手を把らずに、言を以て諭された。

この消息も、同じなのだろう。



胡蘭成（1906～1981年）：中国汪兆銘政府高官。作家・思想家・書家。浙江省嵊県出身

人生万事、一掬の水、一片の野草なのだ。

何処より来たりて、何処へと去るか。

イヤイヤ、何処にも行かず、何処にも帰らず、今、ここ、このままで、私はそのままのいのだ。

今朝も、イノチの大海にプカプカと泡のように浮かびながら、漂いながら、畑に向かう。

